

支援センターだより No.2

2020年2月7日

発行:太平洋核被災支援センター

<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>

事務局 宿毛市山奈町芳奈2779-2

山下正寿 Tel・Fax 0880-66-1763

<masatosi.sky@orange.zero.jp>

四万十川の入田河川敷では菜の花が咲き始めました。例年より一月早い(三分咲)そうです。暖冬のせいですが、皆さん如何お過ごしでしょうか?

さて、うれしいニュースです。ビキニ核被災問題への普及や調査が大きく広がっています。その様子を3人の方に書いてもらいました。又、年末には原告の被災船員・遺族をお見舞いしました。

1. 全県に広がる紙芝居と原画展

ビキニの紙芝居を作る会 橋田早苗



宿毛市原画展で紙芝居上演 写真提供:今城氏

宿毛の原画展に伴い開催した紙芝居上演会(1/26)には30人の参加者がありました。上演者の宮川昌幸さん(現職教員で作る会のメンバー)の語りにみんながひきこまれました。内外ノ浦から参加して下さった遺族の方が「感動しました。こんな仕事をしていたんだなあと思いながら聞きました。」と涙ながらに感想を言って下さり、73才で突然死した岡村さんの遺族は「病気をしながら頑張っていた。スコールのことは良く話していた。悔やまれることはたくさんある。」と思いを語って下さいました。私の方が感動し、紙芝居を作って良かったと思いました。

2017年7月に山下さんと今城さんを講師に学習会をし、つくる会(退職教員3名と現職教員6名)を結

成、9月に作業に入り12月に森本忠彦氏に原画を依頼し快諾してもらいました。その後色々ありながら2018年2月末に一応完成、3月に自由民権記念館で初上演・検証会を行いました。手作りで製品化しながら県教委に「(内容に)問題はない。」との確認をとり、県教委の「300部寄贈すれば県内の小中学校に配布する。37部寄贈すれば各市町村教委に配布する。作る会が何らかの行事をするならば後援する。」との提案を受け、6月に39部を県教委に寄贈し、原画展開催の意思を伝えておきました。

学校現場で社会問題を授業にすることは難しい状況のなかこれは大きな力になりました。7月に高知市神田小学校、8月には野市東小学校にゲストティーチャーでよばれ、その後もいくつかの学校から声がかかっています。窪川の人権教育協議会からは総会の講師の依頼があり、町内の全小中高に紙芝居を配布してくれています。

又、退婦教を中心に紙芝居を寄贈する活動が広がり、特に吾川支部では新婦人と共同で購入し、春野・伊野の全小中学校に届けてくれています。ボランティアで読み聞かせに入っている学校で使ってくれている人もいます。

原画展は、高新文化事業団の助成を受け実現しました。開催市町村では全小中学校児童にチラシの配付が行われています。

原画展を開催した室戸では「こういう展示が行われて嬉しい」という声があり、宿毛でも「全然知らなかった。関心をもたんといかんと思った。」との感想がありました。

今年は核兵器禁止条約が発効される見通しです。身近にあった過去の事を知るだけでなく未来へつづく教材になると思っています。学校現場で利用する先生が増えることを願って、もうひと踏ん張りがんばります。

2. 「被爆国」は、日本だけではなく

… 2020. 1. 14～22 ピースボートでつむぐ国際交流
岡村啓佐 (写真は岡村氏提供)



第 103 回ピースボートに乗船

第 103 回ピースボート「オセアニア一周クルーズ」の水先案内人として、オーストラリアのアデレード～メルボルン～シドニーの区間に乗船し、これらの三都市では、ICAN とともに活動する団体の方々で交流し「ビキニ事件」の真相を紹介し、20 数点ミニ写真展を開催し注目をあびました。

乗船した方々を対象にした講演では、300 名ほどの参加者を前に「ビキニの海は忘れない」と題してお話ししました。船には中国、韓国の方々、在日の方々が300 名近く乗船しているとの事から、導入部分で、日本の侵略戦争と植民地政策の誤りについて触れ、日本人は加害の歴史に向き合い、歴史を学び、過ちを繰り返さない決意で歩み続ける倫理的使命を担っていることを簡単にのべて表題のテーマに入りました。



船上ミニ写真展の様子

「ビキニ事件」をひも解くには、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下が実験であったこと、そして米ソの核開発競争の延長線上にビキニ水爆実験があり、日米両政府の隠ぺい理由があることを強調しました。また「ビキニ事件」の時に、日本人の反核運動を抑えこむために「原子力の平和利用」が持ち込まれ福島原発事故へとつながり、日本はアメリカによって4度の核被害を受けたことを紹介し、日本政府が核兵器禁止条約

に署名・批准しない問題を指摘しました。

講演後、「日本人の口から徴用工問題や慰安婦問題など、加害責任の問題について耳にしたのは初めて」「ビキニ事件が第五福竜丸だけでなかったことに驚いた」「なぜ事件を隠ぺいしたのかよく分かった」「日本に原発が持ち込まれた動機や、福島事故後の汚染が大丈夫か心配している」などなどの感想が寄せられ、ピースボート事務局は反響に応じて「明日から自分たちに何ができるのか」という課題でフリーに討論する企画が後日急ぎで企画され、10 グループぐらいいに 80 人ほどの参加で活発に討論しました。



シドニーで活動されている皆さんと

今回の旅は、私にとっても見聞を広げる機会となりました。それは、オーストラリアは、68 年間ウランの採掘で汚染され、核開発国にウランの輸出し続けてきたこと。その輸出先のイギリスによって核爆弾の実験場となり 1952 年～57 年までに 12 回もおこなわれ、先住民(アボリジニ)が犠牲となり、被爆によってがん等が多発し多くの命が奪われたこと。そして、オーストラリア全土が放射能で汚染され、今も放射能によって苦しめられていることです。

核を持つ国が世界を威嚇し「原子力の平和利用」で原発を各国に建設し、経済大国となったこと。しかし、それらは全て先住民の住む土地のウラン鉱石を掘り出すところから始まり、今も被害を与え続けています。スー・ハセルダインさんは「ウランも金(きん)も、地中深くにそのままに!!」と訴えました。

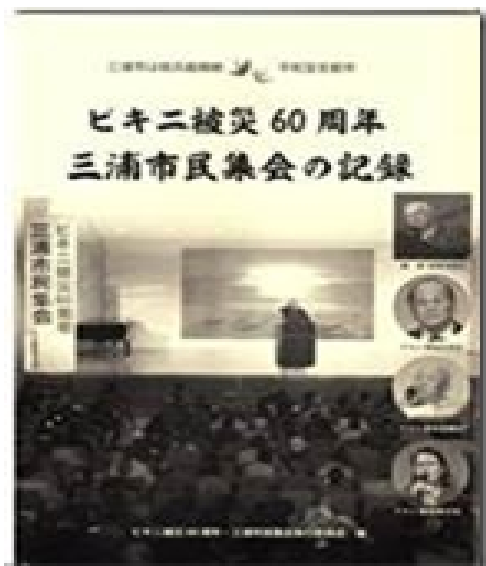
私たち日本人は核の被害者ですが、同時にオーストラリアからウランを輸入している国です。加害者の側に立っていることをもっと自覚しなければと気づかされたピースボートの旅でした。

3. 三浦半島とビキニ被災 2020.01.07

濱田郁夫（写真は濱田氏提供）

2019年12月、三浦半島の三崎港を訪ねた。一昨日教えていただいた、小林さんと連絡が取れたのだ。小林さんは、三浦市の議員さんで、8期目だという。駅まで迎えに来て下さり、「やはり、港を見たらイメージが湧きますからね」と言って、港の方まで案内してくれた。途中、油壺のあたりだったと思うが、道路沿いの老人ホームを指差し、「最近、大石さん（第5福竜丸の元船員）がこちらにきています」と教えてくださった。そして、なんと、その老人ホームの立っているところは、当時の廃棄マグロを埋めたところだというのだ。

小林さんは、森田喜一さんを紹介してくださった。森田さんは、「三崎港報」という地元紙の記者をされていて、ビキニ問題の調査もおこなっている方だ。三浦市は「ビキニ事件三浦の記録」（1996.3.1 編集・発行 三浦市）という本を作っているが、その原稿はほとんど森田さんが書いたということだった。この本は、とても貴重で、行政がそういう本を作ったことに大きな意義がある。たくさんのお話を伺ったが、その中でも、当時の港で検査に当たっていた保険所の職員が頑張って検査していたことの話が印象に残った。船員は、あたかも敵であるかのように職員に詰め寄ったりしたこともあったという。しかし、職員は頑張ってちゃんと検査をした。結果的には、そのことが信頼を取り戻すことにもなったのだという。



いただいた2014年の冊子

もう一つ印象に残ったのは、いただいた一冊の冊子で、それは「ビキニ被災60周年三浦市民集会の記録」というものだった。市民集会が2014年におこなわれ、会場を400人の市民が埋め、市長が壇上で挨拶をし、集会宣言では「・・・本日の集会を新たな出発点として、ビキニ事件とその被災の実相を子々孫々次世代に継承し、核放射能による被害者を作ることのない世界、誰もが安心して暮らすことができる平和な世界を実現するための取り組みを・・・進めていきましょう。」と高らかに宣言しているのだ。つまり、三浦市の中にひとつの市民運動として、ビキニ問題が位置づいているということなのだろうと思う。

原告(被災船員・遺族)へのお見舞い

高裁判決を受け、12月中旬、29名の原告の方々の意思確認を兼ねてお見舞いを実施しました。室戸地区は濱田氏、高知地区は下本氏と岡村氏、幡多地区は山下氏、今城氏、前田氏と上岡が手分けして原告の被災船員・遺族を訪問し、心ばかりの見舞いをお届けしました。皆さん一応に「こちらが世話になっているのに申し訳ない。ありがたい。」「皆さんと知り合いになれてよかった」と感謝して下さいました。

幡多地区では、野菜、ひざ掛けなどをお届けしました。被災船員には独居の方も多く、特に野菜不足を心配する傾向がありました。中には、お返しに伊勢エビを下された方もいて、事務局で新年会の味噌汁としてご馳走になりました。

被災船員の方は概ね健康そうでしたが、原告6名が死亡しており、突然倒れる、痛みが出る、固形物が喉を通らずご飯もお茶漬けのように飲む、薬が手離せない、など医師の治療や健康相談が欠かせない状態です。

裁判については「裁判官は他人の痛みが全くわかってらん」「ここまで来た。何とかしてほしい」「よくここまで追求してくれ、夫の死が無駄死でなくなった」「船員保険の適応をしてほしい」など様々な思いが吐露されました。そして、裁判の今後については役員会に一任するという点で一致しました。

水産庁ビキニ被災調査記録を隠蔽

一 情報公開審査会へ意見書提出一

2020年2月7日提出

2014年10月、日本共産党の紙智子参院議員がビキニ事件に関する資料開示に関して質問に対して、水産庁は「再度調査する」と回答しました。農水省ヒヤリングで、横浜市にある中央水産研究所の資料リストが示され、私たちは中央水産研究所を訪問し、重要文献のコピーを要請しましたが、紙智子参院議員や私たちに何の報告もなく、5カ月たって「相談した結果、開示請求を提出してほしい」という連絡がきました。開示請求は、最初の段階で提示すべきものであり、5カ月以上相談してというのは、開示しないための打ち合わせに時間をかけたと推定され、怠慢で処分に当たる対応です。(中略)

また、2019年9月9日に「指定港における水揚げ魚類放射能検知成績」の開示請求しましたが、これも10月10日に不開示決定通知されました。水産庁は、不開示の理由に、中央水産研究所再編経過などを述べているが、「指定港における水揚げ魚類放射能検知成績」について「昭和35年所蔵目録に記載あるが、中央水研への移管時のカード目録なし。現物なし」がなぜそうなったのか理由を述べていない。他の文献は残っているのになぜ次のような基本的な調査記録が揃って行方不明になったのか。この文書の廃棄記録がないのであれば、政府内の判断で水産庁と相談して、密かに廃棄したか移動していると考えられる。(資料1)

10	指定港における水揚げ魚類放射能検知成績
11	近海マグロ漁場の放射能汚染に関する調査(案)
12	ビキニ水爆実験の漁業等に及ぼす影響に関する調査要綱(俊鵜丸)
13	ビキニ海域水爆影響調査現況経過

政府全体で対応し、3月から12月まで指定5港中心に調査をした重要な記録を紛失しながら、保存期間だとか裁判判決だとかを理由にするのは本末転

倒であり、情報公開についての政府の姿勢が疑われま

す。私たちは、こうした一連の経過について、「日本政府は、アメリカの核政策に追従し、ビキニ事件を第5福竜丸事件にわい小化して解決し、ビキニ事件を歴史上なかったものとする「政治決着」を行い、以後、徹頭徹尾、ビキニ被災を隠し続けました」と厳しく告発し、高松高裁で意見陳述書を提出しました(資料2)

安倍政権の情報隠蔽は、民主主義の根幹を揺るがし、国民の批判が高まっています。ビキニ被災船員の被害状況を裏付ける資料であり人道的立場からも公開されるよう、情報公開審査会の公平な判断を求めます。

「県にビキニ被災者救済措置を講ずるよう意見書提出を求める」市町村議会請願書

3月議会に向けて取り組み中です。

「裁判中に6名の原告がガンや心筋梗塞等で亡くなった事実を考えると、時間的猶予がありません。船員保険制度や新たな救済立法の検討とともに、まずは県として救済条例の制定の検討や健康・生活相談など、高知県に具体的な救済措置を一刻も早く取るよう、貴議会より意見書を提出していただきますよう、強く願うものです」

「県事業実施」へ副知事要請

前尾崎知事が県議会で、「太平洋核被災支援センターなどが追跡調査を継続的に実施していけるような支援策を検討する」「判決において、立法府及び行政府による一層の検討に期待するほかないとされたことを踏まえ、どのような法的枠組みがあれば救済に向けた取り組みが可能か検討したい」との知事答弁を踏まえ、2019年度の補助事業として、ビキニ環礁水爆実験に関連した健康相談会やシンポジウム開催に向けて270万円余の予算が県議会で確認され県との協議をすすめてきました。しかし、厚労省派遣人事で健康対策課長が昨年4月に着任し、事業が年度末まで停滞し、空洞化の危険があり、2月3日に副知事要請をしました。

副知事は、前知事の県議会答弁どうり実地するよう指導すると明言しました